

聖書：マタイ 26：31～35

説教題：あなたがたより先にガリラヤへ

日時：2020年7月26日（朝拝）

今、イエス様が十字架にかかる前日夜の出来事について書いてある部分を読んでいきます。前回はいわゆる最後の晩餐と呼ばれる場面を読みました。そして次回、ゲッセマネの園で祈りをささげた後、イエス様は敵の手に逮捕されます。今日の箇所はその直前の場面となります。イエス様は弟子たちに、彼らが今夜つまずくことについて予告されました。31節：「そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、今夜わたしにつまずきます。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散らされる』と書いてあるからです。」 「つまずく」とは、イエス様にもうついて行くことができなくなることです。従う歩みをやめてしまうことです。「わたしにつまずく」とありますが、第3版までは「わたしのゆえにつまずく」と訳されていました。これはこれからイエス様に起こる事柄のゆえにということです。具体的にはイエス様が敵の手につかまり、十字架刑へと引っ張って行かれることを指します。それを見て弟子たちはイエス様について行けなくなり、離れ去る。しかも「今夜」とイエス様は言われました。そしてイエス様は旧約聖書のゼカリヤ書 13 章 7 節を引用されます。そこの「羊飼い」はイエス様のこと。また「羊の群れ」は弟子たちを指します。また羊飼いを打つ「わたし」は神様。そして「打つ」とは具体的にはイエス様の十字架を指します。ここにイエス様がこれから経験される苦難、そして十字架は、究極的には神の御手によることが言われています。それは何世紀も前から預言されていたことであり、神のご計画の中にあることであるということです。このゼカリヤ書の預言はイエス様の上で起こることだけでなく、羊の群れに起こることについても語っていました。羊飼いが打たれると羊の群れは散らされる。その羊たちは散り散りバラバラになる。つまりこれは弟子たちが雲の子を散らすようにイエス様のもとから離れ去り、逃げて行ってしまうということです。

なぜイエス様はこのことを弟子たちに語ったのでしょうか。彼らのご自分から離れ去って行くことを思って恨めしくなったのでしょうか。そうではありません。むしろ私たちがここに見るのは、イエス様の弟子たちに対する深い関心、深い思いです。イエス様はもう間もなく、敵の手に捕らえられます。そして恐ろしい十字架の死に向かった最終プロセスが始まります。そんなギリギリの場面なのに、イエス様はご自身の苦しみのことで頭が一杯だったのではなく、なお弟子たちのことを心にかけておられたのです。

彼らがこのあと間もなく経験するであろう試練を思っ、彼らに準備させているのです。何も知らずに突然そのことが起こってパニックになり、訳の分からないことにならないように、——そう言っても、彼らはパニックになってしまうわけですが、——彼らにこうして事前に警告を与え、備えさせているのです。

32 節では続けてこう言われました。「しかしわたしは、よみがえった後、あなたがたより先にガリラヤへ行きます。」ここでイエス様はやがての復活について言及しています。「わたしは羊飼いを打つ」と言われた厳しい扱いと死をイエス様は経験されますが、その後復活が来ます。そしてその後で「あなたがたより先にガリラヤへ行く」と言われました。ガリラヤは彼ら弟子たちの多くの出身地です。彼らが弟子たちとしての歩みを始めた場所です。そこへ先に行くと言われた。そこであなたがたと再び会うことができると言われた。

しかしこの言葉はペテロにとって心穏やかに聞ける言葉ではありませんでした。彼は 33 節でこう言います。「すると、ペテロがイエスに答えた。『たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません。』」彼としては自分がイエス様を見捨てて、イエス様から離れて行くなんてことはとても考えられない。イエス様に従う歩みを放り投げるなんてことはあり得ない。もしそんなことが弟子たちの間に起こるとしても、それは私ではない。たとえ全部の者がそうなっても私だけは決してそういうことにはなりません！と彼は宣言します。彼は自分についての絶対の確信を持っていました。他の人はダメでも自分だけはどんなことがあってもイエス様について行く。この私だけは他の者たちと違う。彼には 12 弟子のリーダーとしての自負心もあったのでしょう。

そんな彼にイエス様はさらにこう言われました。34 節：「イエスは彼に言われた。『まことに、あなたに言います。あなたは今夜、鶏が鳴く前に三度わたしを知らないと言います。』」イエス様はここでペテロがイエス様のことを知らないとはっきり言うと言われました。これはイエスという人と私は関係ないと言って、イエス様を見捨てることです。それを今夜、鶏が鳴く前に、と言われました。とするとあと数時間のことです。しかも 3 回も！です。1 回なら間違っ、口が滑って言うてしまうことがあり得ても、3 回も繰り返して？！ペテロにとっては益々あり得ない話です。この私がそんなことをするはずがない。他の人ならいざ知らず、私にとってそれは絶対にありえない。私はそこまで薄情な人間ではない。そこでペテロはイエス様にこのように言葉を返しました。35

節：「ペテロは言った。『たとえ、あなたと一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。』弟子たちはみな同じように言った。」彼はここでイエス様と一緒に英英雄的な死も喜んで受けると言い切ります。ここで「たとえ、一緒に死ななければならないとしても」と語ったペテロの言葉には、イエス様が死ぬとはまだ本当には考えていない彼の思いが現れています。しかし万が一、そうなったとしても私はあなたと運命をともにする。どこまでもあなたと一緒にです。この私においてはそうです。そのことを信じてください！あなたを見捨てることはありません！そのように彼は力を込めて言い張りました。またペテロだけでなく、他の弟子たちも同じように言ったとあります。

しかし実際はどうだったのでしょうか。それはこの後に記されます。この章の56節に、イエス様の逮捕の場面が記されますが、56節後半にこう記されます。「そのとき、弟子たちはみなイエスを見捨てて逃げてしまった。」決して見捨てません！と誓った彼ら皆みなイエス様を見捨てます。またその後の69～75節には、ペテロの3回に亘るイエス様の否認の様子が記されます。ペテロは繰り返し、イエスは知らないと言い、3回目に至っては嘘ならのろわれてもよいとまで誓って、あの人とは関係がないとはっきり言い切りました。そこで明らかにされることは何でしょうか。それはペテロは自分は絶対にそんなことはしないと誓ったことを、いとも簡単にやってしまう人間だったということです。見捨てません！と言いながら、見捨てる人。どこまでも一緒にです！ついて行きます！と約束しながら、主がこぶしで殴られたり、平手で打たれたりするのを見てみると、恐ろしくなって自分を救い出すために知らんぷりする人間。他の者みんながそうなっても私だけは大丈夫！と他の人を引き合いに出して自分を持ち上げておきながら、あっさり裏切る人。つまりペテロは自分のことを本当には分かっていたということです。彼は自分が思っているようなまともな人間では決してなかった。3年間に亘り、大きな愛を注いでくださった特別の先生を都合一つで裏切る人。思知らず、高慢で、自分中心の人間。ペテロは3回イエス様を知らないと言った後で、鶏の鳴き声を聞き、イエス様の言葉を思い起こします。そして彼は「外に出て行って激しく泣いた」とこの章の最後に記されます。彼はこの時、初めてのようにして本当の自分に向き合わされたのです。彼の前に言い訳ができないようにして突き付けられたのは考えられる限りの嫌な人間、罪の塊以外の何者でもないという自分の姿でした。これこそ彼が直視しなければならない本当の自分であったのです。

私たちもこのことを自分に当てはめて考えてみる必要があるのではないのでしょうか。自分は今、自分が思っているよりはるかに罪深い人間なのではないか。自分は自分のことを良く分かっていないのではないか。いや、私は違う。ペテロや他の人にはこれは当てはまっても、私はそこまでではないと言うなら、ペテロと同じです。彼も最初は、私はそんな人間ではない！と言っていました。ですから私が今、自分をどう思っているかは、自分が本当にそういう人間であることの保証にはならないのです。むしろ私たちも自分の本当の姿を知ったらペテロのように倒れて立ち上がれなくなる、そういう人間なのではないかと考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

しかしこんどうしようもない罪人にとっての素晴らしい福音がここに 있습니다。三つのことを心に留めたいと思います。まず一つ目はイエス様はこんな罪深いペテロのことを全部知っておられ、それでも彼を見捨てなかったということです。イエス様はここで弟子たちがみなご自分を見捨てて離れて行くことを知っておられました。ペテロは絶対にそんなことはしないと誓っていますが、必ず3回に亘って否認することを知っておられました。イエス様はそんなことをしたらおまえたちとの縁は切る！と言っているのでしょうか。そうではありません。イエス様は彼らの醜い姿をすべて知っているのに、なお彼らとともにいて、導いておられました。ペテロはやがて自分の本当の姿を知って愕然とし、立ち上がれないほどの状態になります。自分で自分を受け入れることができない状態になります。しかしイエス様は全部知っていた。ウワ～、汚い！と言って、離れて行くことをしません。これは私たちに対しても当てはまります。イエス様は私たちの最も汚いところまですべて知っておられます。ですから私たちのある姿を見て驚き慌てて、私たちから逃げて行くことはありません。私たちの普通の人間関係では、そうは行かないと思います。あまりにも醜い姿をさらけ出したら、一緒にいた友だちは去って行くでしょう。この人はこんな人だったのかと驚いて、嫌な顔をして離れ去って行くでしょう。ですから私たちの普通の人間関係では、相手に受け入れてもらえるために、少なくとも立派な人間であるように見せかけて行かなければなりません。魅力ある人であるかのように、中身が色々ある人のように見せ、私と一緒にいることであなたにもメリットがあるよ！というアピールをし続けなければならない。そうでないとやがて捨てられます。見放されます。しかしイエス様はそうでないのです。イエス様は私さえ知らない最も汚い部分も全部知っておられるのに、なお捨てない。ここでもなお弟子たちとともにいて彼らを愛し、彼らのためにこのように語りかけているイエス様のお姿があります。

2つ目に心に留めたいことは、イエス様はそのように罪深い彼らであることを知っているお方として、だからこそこの時、十字架への道を歩んでおられたということです。なぜイエス様が神によって打たれる必要があるのか。なぜ罪のない方が十字架にかけられる必要があるのか。それは一言で言えば私たちの罪の身代わりを果たすためです。本来、私たちが受けるべき罪の罰を、イエス様は神の御心に従って代わりに受けようとしておられます。そうして私たちが神の前に罪赦され、救われるという道を開こうとしてくださいました。十字架への道は言うまでもなく大変な道です。多くの人々の罪をすべてその身に背負うことは恐ろしいことです。イエス様は敵の手に捕まって、その十字架への道が最終的にスタートしようとするこの直前の時、弟子たちがみな離れ去って行くことをご存知でした。イエス様は誰から助けてもらうこともなく、まさに一人で、すべてを背負って行かなければなりません。しかしイエス様は彼らの救いのために、この道を決然と進もうとしておられます。ただ、厳しい試練を通ることになるであろう弟子たちのことを心にかけて、このように前もっての警告を与えてくださったのです。

そして3つ目に心に留めたいことは、その後のことです。イエス様はよみがえった後、なお弟子たちとガリラヤで会うと言われました。ガリラヤは彼らが最初にイエス様の弟子となった場所です。彼らはイエス様を見捨てて離れて行きますが、その彼らはあのガリラヤで、もう一度もとの関係に戻ることができると言われていています。あなたがたはわたしを裏切るから、もうあなたがたとの関係もおしまいだ！とはイエス様は仰らない。イエス様は彼らより先にガリラヤへ行くのです。羊飼いとして彼らの先導役を果たし、この後も彼らを導き続けてくださるのです。なお弟子としてなお認めて、新しい関係の中で彼らを用いてくださるのです。このような希望のメッセージを、イエス様はすでにここで語っていてくださった。この時の彼らの心には、この言葉は留まらなかったかもしれませんが、後々の彼らにとってこれはどんなに大きな慰めを持つ言葉であったでしょうか。

果たして私たちはイエス様の前にどうでしょうか。ペテロと同じように、私はそんなのひどい人間ではない、醜い人間ではないと主張するでしょうか。いくら私たちが力を込めてそう言い張っても、それは頼りないものです。何かが起これば、もろくも崩れ去るものです。私たちをテストするある種の試練が臨むなら、私たちは化けの皮を剥がされ、自分も良く知らなかった本当の自分の状態を見させられるようになる。そしてそれこそ私の本質的な姿であって、その自分の罪が実は毎日の色々な場面で、日常生活で、

あちこちに芽を出して、人を傷つけ、また嫌な臭いを周りに振りまいていることに気づかされるようになる。しかし今日の箇所にある慰めは、イエス様はそんな私たちを全部ご存知でいてくださるということです。私以上に私のすべてを知っておられる。なのに私から離れて行かない。むしろこんな者のために十字架にかかり、より頼む私の罪を赦し、きよめてくださる。私たちはこのような神の御子が私たちとともにいてくださることを感謝したいと思います。そしてこの方のもとで（聖書の光の下で）自分自身を恐れずに振り返り、どういう者であるかをさらに教えていただく者でありたい。たといそこでどんなに愕然とするような自分であることを発見しても大丈夫。そのために息が止まって倒れてしまいそうな自分であつても大丈夫。私は驚いてショックを受けてもイエス様は驚かない。イエス様はすでにご存知で、そんな者のために十字架を通しての救いを用意してくださいました。私たちは空しく自分を誇り、立派な者であるかのように自己主張するのではなく、このすべてを知っていてくださるイエス様のもとで、真の安らぎを得る者でありたいと思います。そしてイエス様の十字架がこの私のためであったことを感謝して受け取り、罪赦され、きよめられ、新しくされて、なお主の弟子として永遠の御国に向かって養われ、導かれる幸いな主の羊としての歩みへ導かれて行きたいと思えます。